

# 思ひ草

第49号

令和8(2026)年1月29日 発行

## 旅行の楽しみ

初等教育学科教授 吉川 成夫



自分で旅の計画を立て、現地でいろいろと問題解決しながら行動するのが楽しい。学生の皆さんには、忙しくてむずかしいと言うかもしれないが、若いときの旅の経験は人生後半でのそれとは違うはずだ。ぜひお勧めしたい。

最近の私の様子を書いてみよう。年に一度くらいドイツへ旅行している。なぜドイツなのかというと、古い町並みがきれいなこと、鉄道に乗るのが好きなこと、ビールとソーセージが美味しいこと、言葉の響きが好きなことなどが理由だ。

計画は半年ほど前から立て始める。出国と帰国の日程をはじめに決めて、航空会社のホームページで航空券を探す。早めに購入すると価格が安いし好みの座席が指定できる。ドイツ国内の旅程については、地図を見ながら、鉄道での移動を考える。ドイツ鉄道(DB)のアプリを携帯などに入れておくと、乗り換え案内が調べられるし、切符の購入もできる。切符は携帯にPDFファイルで送られてくる。出発の数ヶ月前には、訪問する都市を決める。DBの切符は事前に、乗車の日時と列車番号を指定して購入すると、普通切符の半額以下の料金になるのでお得である。宿泊の予

約は、大手のホテル予約サイトを利用する。その中から好みのホテルを選び予約する。

航空券、鉄道切符、ホテルの予約ができれば、あとは現地での旅行を楽しめる(はずだ)。自分のドイツ語は、かつて身につけた知識が剥落しているので実用性がひくい。それでも少しドイツ語を話すと、相手の人が笑顔になってくれる。今年の夏はハンブルク美術館の中で、となりにいた女性から「日本の方ですか」と聞かれ、「はい、日本からの旅行者です」と答えると、それからしばらく会話が続いた。息子さんは日本の女性と結婚し、京都で暮らしているとのこと。

計画の最中や旅の途中でトラブルに遭うこともあるが、幸運なこともある。冬の晴れた早朝に、薄雪をまとったノイシュバンシュタイン城を間近に見たときは感激した。ミュンヘン・バイエルン国立歌劇場でのオペラの券をオンラインで探すと、最前列で中央の席を2枚購入できるという奇跡的な幸運もあった。良いことがあると、悪い方の記憶はうすれしていくようだ。

## 「子ども、子育てを支援する人」を支援する

子ども支援学科教授 塩谷 香



少子社会が顕著になった現在、少ない子どもをどのように育っていくのかが社会の課題になりつつあります。孤独な子育て、不安を抱えた保護者の支援がクローズアップされて「子育て支援」という言葉も定着しました。しかし子育ての問題は社会の変化に大きく左右されて問題の核心が目まぐるしく変化しているのが現状です。

「子どもの最善の利益」が最大限尊重され、その実現のために働くのが間違いなく保育者・教育者・支援者の使命ですが、職場の人間関係や保護者対応が主な理由で休職に追い込まれるケースが多数あると認識しています。一昔前と比べると仕事そのものが多様化、複雑化し力量が要求されているのも事実です。つい先日の研修会場で「そこまでやらなければなりませんか?」と質問され、一瞬の返答に困ったことがありました。

けれど、子どもと共に在り続け、子どもの懸命に生きる姿に元気をもらい、頑張る力をもらえるこの仕事はやっぱ

り素晴らしい仕事です。子どもが健やかに成長し、保護者も保護者として成長し、そして保育者も専門家として成長する、トリプルウインの実現は不可能なことではありません。保育者・教育者を目指す若い人たち、さらに現職の先生方、子ども・子育てを支える人たちをどうしたら支えることができるのか、希望をもって仕事を続けられるようにするためにどうしたらよいのか、すべての大人が考えなければなりません。人任せ、保護者任せ、学校・園任せではなく、それぞれの立場でやるべきことがあります。

そのためには、まず専門家である保育者・教育者、支援者の声を真摯に聞こうとする姿勢が最も重要です。行政が動くには時間がかかりますが、あきらめずに先生方の発信を支え、研究成果として社会に伝えていくことが今後研究者にますます求められることだと思います。どうしたら先生方を支えることができるのか、地域の一大人として研究者の端くれとして今後も考えていくつもりです。

## 教育実習

### 目的に沿った指導をすること

健康体育学科准教授 みた さおり



離島の調査研究を行っていると、島特有の文化に触れることができます。先日訪れた沖縄県の八重山地方の黒島には、「15の島立ち」という言葉がありました。離島地域には高等学校がないことが多く、中学校を卒業すると、進学や就職を希望する子どもたちは島を出て一人暮らしをはじめるか寄宿舎生活を送ることになります。これが「15の島立ち」という言葉の所以です。そのため、黒島の先生方は、それを見越して、必要以上に子どもたちの問題に介入せず、「見守り中心」で子どもたちだけの力で問題を解決する力を育むことを目的に指導をされておられました。この目的によって子どもたちとどう関わるか何を教えるのか教員間で検討が行われ、子どもたちの状況に合わせて指導が実践されています。

例えば、島での暮らしに直結する生活指導場面においては、「ケンカが起つて教員が入って解決することは簡単で本島地方の通常学級だったらそうするけれど、黒島では、子どもたち同士で納得いくまで話し合わせるようにしている。時間はかかるけれど、離島の人間関係は長い時間変わらない。そこを考えて指導しないと子どもたちが島で生きづらくなってしまう。」というように、人間関係に変化の少ない島の実態に合わせた指導がなされているというわけです。

教育実習においては、教育の現場で行われている授業を参観し、自分自身でも授業を計画して実践する場があります。指導する際には、ただ技能を教えるだけではなく、何ができるようになれば子どもたちの躊躇が解消され、どのように工夫すれば運動のおもしろさを享受することができるのか、子どもたちの様子をよく把握する必要があります。その上で「何ができるようにするのか」という明確な目的を立て、その目的を達成するために評価方法を含めて方法を考えるところにおもしろさがあり、それが教材作りの出発点になります。限られた単元の中で育める能力は限られていますから、ますます明確な目標を目の前の子どもたちの状況に合わせて設定し、子どもたちが深く学ぶことができるような仕掛けを授業の中に組み込んでいくことが求められます。

体育の授業は学習です。子どもたちが「どのように学び、何ができるようにするのか」、それを達成するために教員は「どのように指導するのか」についてよく検討し、実習校の先生方にご指導をいただきながら実践的な指導力を身に付けることができるよう奮闘してほしいと思っています。

### 生徒に寄り添う指導を学んだ教育実習

健康体育学科 3年 はた かのん

私は公立中学校で3週間教育実習を行い、中学2年生、3年生の保健体育を担当しました。最初は不安でいっぱいでしたが実習先の先生方や生徒が温かく迎えてくださり、とても学びの多い、充実した日々を送ることができました。

私は教育実習で授業を行う中で、「生徒一人ひとりに応じた指導」の重要性を学びました。実習前の私は授業計画を立てる際に、学習内容をどのような順序で指導するか、時間内にすべて扱えるかといった点に意識が向いていました。しかし、授業を実際にやってみると生徒の理解度や反応は想像以上に多様であり、同じ説明をしてもすぐに理解できる生徒もいれば、動きやルールがわからず戸惑ってしまう生徒がいることを実感しました。そこで、指導教諭の先生と毎時間の授業を振り返り、生徒がどの場面で躊躇やすいのか、どのような言葉を使えばより伝わりやすいのかを話し合い、次の授業づくりに生かすように努めました。ホワイトボードの使い方を工夫して要点を視覚的に整理したり、実際に動きを見せながらシミュレーションを行ったりすることで、生徒が技術を習得しやすくなるように心掛けました。その結果、技術やルールの理解が進み、試合中に混乱する生徒が減ったり、練習をスムーズに取り組む生徒が増えたりする変化が見られました。自分の工夫が生徒の学びや行動の変化につながっていることは、大きな成果であり、教師としてのやりがいを感じる経験となりました。

今回の実習を通して、教師の役割は「教えること」だけでなく、生徒一人ひとりを理解し、その学びを支える存在であることを学びました。この経験は、教師としての基礎を築く貴重な学びであったと感じています。教師として成長するためには授業での生徒の反応や理解の様子を丁寧にくみとり、授業後に振り返ることが重要だと強く思いました。今後も生徒理解を大切にし、実践と振り返りを積み重ねながらより良い授業を創り出せる教師へと成長していきたいです。

## 教師塾

### 東京教師養成塾より

#### 理想と現実の間で見つけた学び

初等教育学科 4年 大栗 優貴

大学3年生の11月、「いい先生になりたい」と漠然とした理想を抱いて入塾した東京教師養成塾での1年間は、理想と現実のギャップに、葛藤し続けた日々でした。特別教育実習では、教材研究を重ねても授業が思うように進まず、力不足に涙することもありました。しかし、私を支えてくれたのは子どもたちの存在で、「先生の授業だ!」と喜ぶ姿や真剣に向き合ってくれる姿に、何度も励されました。理科の授業では、自作の模型を用いて筋肉の収縮を視覚化するなど、指導書通りでなく子どもの視点に立った授業を模索しました。その中で、授業を組み立てる面白さや、教材研究の奥深さを体感しました。また、教科等指導力養成講座で仲間と切磋琢磨し、実習と往還しながら理論と実践を結びつけた経験も、私の大きな財産となりました。

私はこの1年間で「いい先生」に正解ではなく、目の前の子どもに誠実に向かい続ける姿勢こそが大切だと気付きました。恩師のように、子どもと同じ目線で喜びを分かち合える存在になれるよう、一人一人の見取りを大切にし、周囲と連携しながら安心できる環境を整えていきたいです。「会えてよかった」と思われる教師を目指し、子どもと共に私自身も成長し続けていきます。

### かながわティーチャーズカレッジより

#### ティーチャーズカレッジでの学び

初等教育学科 4年 宮本 和

私は「かながわティーチャーズカレッジ」のチャレンジコースに参加しました。講義では「神奈川県の求める教師像」を軸とし、教育課題だけでなく、コミュニケーション能力や社会人としての自覚など、自分がどのような教師になりたいのか改めて考えることができました。また、大学や年齢の垣根を超えて、教師を目指す仲間に出会い、新たな考え方や価値観を共有することができました。講義だけではなく、実際に学校に行き、子どもたちや先生方と一緒に活動する機会がありました。中でも小学校の運動会への参加は特に印象に残る活動の1つです。普段の授業とは異なる環境の中での先生方の指導の様子や、子どもたちが喜びや悔しさを感じながら一生懸命に取り組む姿を見て、教員という仕事の新たな魅力を実感しました。さらに、共に学んだ受講生とは教員採用試験当日にも再会し、安心感から試験の緊張も和らぐなど、約半年間学び合った受講生の存在は大きな支えとなりました。

このティーチャーズカレッジでの経験や学びを活かして、春から頑張ります。

### よこはま教師塾アイ・カレッジより

#### よこはま教師塾『アイ・カレッジ』での学び

健康体育学科 4年 小原 悠翔

私は大学3年生の9月から、横浜市教育委員会が運営している教師塾である『アイカレッジ』に行きました。主に、横浜市が行っている教育の方針や教師としての心構えなどを学びました。

普段の様々な思いを持った学生が混在している大学の講義とは異なり、同じ行政の教育公務員を目指すという同じ志の者たちとの対話やグループワークをすることができ、横浜市の教員になることをより一層目指すきっかけになりました。アイカレッジの講義の中で様々な横浜市の取り組みを知り、授業の一環での学校ボランティアなどでは多くの現場の声を知りました。このように横浜市の教育について深く知ることができ尚且つ、教員採用試験への対策としても大きな役割を果たしたと感じます。横浜市は模擬授業や面接、小論文など試験の内容が多く対策がしにくいものばかりですが、アイカレッジで早めに横浜市や教員について学ぶことによって、もともと知識を持ったうえで採用試験の対策、試験本番に挑むことができました。

今後もこのようなアイカレッジでの大切な経験や仲間たちとの出会いに感謝し、身体的にも精神的にも不安定な時期の子供たちの支えになれるような教員になれるように尽力していきます。

### 彩の国かがやき教師塾より

#### 教師0年目

健康体育学科 4年 石田尾 龍之裕

私は大学3年生の1月から1年間彩の国かがやき教師塾マスタークラスに参加しました。ここでは、毎週の学校体験実習や月に一度の講演・講義・演習、宿泊体験活動などを通じて多くの知識や経験を得ることができました。その中でも最も心に残っているのは学校体験実習です。その実習では週に一度程度しか学校に行かないため、初めは生徒と仲良くなれるかさえ不安でしたが、最後には私も生徒も涙ながらのお別れをし、最高の思い出となりました。また、よくバレー部で指導をしていたある生徒が「先生のおかげで夢ができました。先生の教師になりたい理由を聞いて私も教師を目指してみようって決めました!」と言ってくれました。初めて生徒に夢を与えることができたことに喜びを持った反面、教師として見られているという自覚を再確認する機会となりました。

大変なことがたくさんありました。しかし、教師を目指す仲間と共に1年間の活動はとても良い経験となりました。教師0年目として過ごしてきたこの1年間の経験を胸に、これからも研鑽を積んで参ります。

## 教育ボランティア

### 宿泊体験学習の意味

初等教育学科 4年 上山 壮太

私はこれまで小学校の宿泊体験学習に計10回引率ボランティアとして参加してきました。宿泊体験学習ではその日初めて関わる児童も多く、関係づくりに難しさを感じる場面もありました。しかし、共に活動を重ねる中で児童との関係が次第に深まり、信頼関係が築かれていくことを実感しました。また、1日目にはできなかったことが2日目にはできるようになるなど、短期間で成長する児童の姿も見られました。

私が特に印象に残っているのは6年生の修学旅行で個別支援級の児童についていた時のことです。普段は落ち着きのない児童が室長に立候補し、役割を得たことで、仲間に声をかけたり、片付けを率先して行ったりする姿が見られました。私はその姿を見て、「○○さんが周りをよく見て行動できているから、周りの友達はとても助かっているよ」というように具体的に褒め、肯定的に関わることで、自信をもったのか、活動全体でも周囲を気遣う行動が増えていきました。この経験から宿泊体験学習は普段の学校生活では見えにくい子どもの可能性を引き出す大切な場であると感じました。

私も来年度から活動の意味を考え、可能性を拓くことのできる宿泊体験学習を実現していきたいです。

### 子どもたちの成長

子ども支援学科 4年 荻田 奈美

公立幼稚園のボランティアを1年生の春休みに紹介して頂きました。ボランティアが縁となり、インターンシップに、夏季保育アルバイト、実習と長く関わらせていただき、2年保育の子どもたちの入園から卒園を断続的にみることができました。

年少時には、大好きだと後をずっとついて回り大人と関わりたいと求めることが多い子どもが、子ども同士で遊べるようになりこちらが成長と寂しさを感じていると突然「先生これあげるよ」と工作したわっかを私の薬指にはめてくれ、思わず担任と顔を見合せた瞬間でした。

ボランティア体験では、こんなささやかな子どもたちの日常に関わり、振り返ると成長したなとしみじみ感じることが楽しくやりがいがあったと思います。公立幼稚園の試験においても、○○ちゃんなら…と子どもの姿が想像しやすく、事例に対し取り掛かりやすかったです。また、先生方が援助の意図を教えてくださったり、アドバイスを下さったりと保育者としての視点を磨けたことも春の就職が近づいた今、わずかな自信になっています。

## 未来塾

開講講座は「2講座」、延べ受講者数は「113名」でした

担当・講座名	開講回数・受講者数（令和7年12月末日現在）
大矢隆二先生の 講座 ペン字（硬筆）学習会	5回開講、延べ受講者数 51名
小笠原優子先生の 講座 子どもの学びにつながる地域 学習教材調べと教材化	5回開講、延べ受講者数 62名 令和8年1月以降 1回開講予定